
素直になれば...よかった...

Misho

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

素直になれば…よかった…

【Nコード】

N9842S

【作者名】

Misho

【あらすじ】

私の今の状態を書いた短編小説。

偽らない私の姿——ボクが出てきます。

めっちゃ病んでるので、嫌いな方はバックしてください。

（前書き）

私を苦しめる日々――

物を壊す毎日――

私の今の状況を、小説風にしました。

誰か、私――ボクを助けて。

ガシャアアン！！

——今日もまた、自分の部屋のも
のを壊す。

私がこうなったのは、いろいろな苦しみが私にのしかかったからだ。

私は学校では、普通の人間として、友達と喋ったり、じゃれたりする毎日を送っていた。

女子は人数が少ないので、みんなと仲がいつもりだ。（人は何と
思っているかわからないため）

しかし、そうやってみんなと関わっていると、陰で誰かの悪口を言
われるようになった。

自分が仲良くしている人のことをそうやって言われるのはつらかつ
た。

それに気付いた本人が『大丈夫』と無理に笑っているのを見るのも
つらかった。

そのうち、自分も影で悪口を言われているんじゃないかと不安にな
った。

必要とされていないんじゃないかと思うようになった。

日ごろ、友達にふざけて言われる『バカじゃん』『アホか！』なん
ていう言葉を言われるだけで、その言葉が妙に心に刺さるようにな
った。

そして、このころから私は人と自分の間に壁を作るようになった。

そしてある日、インターネットでブログを始めた。

前からオンラインゲームはやっていたが、ブログは初めてだ。

最初は何を書いたらいいかわからず、写真を載せたりしていた。

そして、私のプロフィールを見てくれた人が声をかけてきた。

『○○、私も好きですよ』
そんな他愛もない一つのコメントが、私にとってはすごくうれしかった。

そして、私にはネット上での仲間が増えていった。

そして、『この人たちになら、本当の私を出せる』と思った。

だから、本当の私——ボクを出した。

『ボク』は、自分を傷つけたくなくて、心の奥に封印していた自分。会ったこともない人で、仲良くしてもらっている人になら本当の自分を出せた。

コメントをするだけで、お互いのブログを読むことで、楽しんでいた。

たったそれだけの関係なのに、私——ボクは画面の向こうの相手のことを信用していた。

ところがある日、母とケンカをした。

唯一、現実で向き合える人とケンカをした。

正直、最初はムキになって仲直りしないつもりだった。

だけど、日に日に母の必要性に気付いた。

——自分の過ちに気付いた。

そして、謝ろう謝ろうと思った。

しかし、口下手ですぐかつとなってしまう私は、謝ることができなかった。

そしてある晩——。

父に引きずり出され、母と3人で話した。

自分なりに謝ったつもりだった。

自分なりに感謝の気持ちを伝えたくもりだった。

自分なりに、あくまでも自分なりに。

飾らない、ありのままの自分——ボクの気持ちを伝えたくもりだった。

だけど、その時学校での悩みもあったせいか、やつあたりしている

ように言ってしまった。

結果——最悪の結果だった。

プロ友のことを、気持ち悪いといわれて腹が立った。

『気持ち悪くない！』と反論した。

『得体のしれない人と何やってんの？』

プロ友だけが心の支えだったボクにとって、最悪の言葉。

そして、その後何を言ったかは覚えていない。

しかし、母と仲直りしたかったからありのままの気持ちをもう一度伝えた。

そして、逃げた。

これ以上傷つきたくなかった。

これ以上つらい思いをしたくなかった。

これ以上涙を流したくなかった。

しかし、後に残ったのは後悔だけだった。

翌日、起きてみると妙に心が重かった。

体も起こしたくないほど。

とりあえず起き上がってみた。

しかし、なんだか何もする気が起きなかった。

ただ心にぼっかり穴が開いたようで、つらさだけが胸の奥に残っていた。

今は昼ごろだろうか——

お腹はすぐが、何も食べる気がしなかった。

そして、心には酷いくらいのつらさが残った。

だから——自分の腕を傷つけた。

爪で何度も何度も切るように腕をすった。

腕が腫れても気にしなかった。

痛みなんか感じなかった。

むしろ、わずかな快感がした。

——そのままリストカットをしようとした。

しかし、なかなか腕は切れず…

結局、1つの大きな傷が残っただけで終わった。

夜に、ブログを書いた。

プロ友に心配をかけたくなかったから。

だけど書いた内容はとても酷くて――

結局みんなを心配させるだけだった。

その夜、ボクは怖い夢を見た。

周りの人がどんどん消えていくんだ。

消えていく――というより、得体のしれない何かに削られ

ていくといった方が正しい。

どこからともなく、ボクたちに迫ってくる何か。

ボクはみんなの中心にいた。

周りにいる人たちが、『何か』によって音もなく削られていく。

飛び散る血しぶき

こだまする叫び声

底知れぬ恐怖がボクを襲った。

ついに残ったのはボクだけになった。

得体の知れぬ何かがボクの体に触れる。

ボクの身体から血が出る。

しかし痛みはなかった。

夢だから――だろうか。

恐怖心も無かった。

ただ、このまま消えていくのかとしか思わなかった。

しかし、そう思った瞬間『何か』は消えた。

ボク一人を残して。

周りの人が削られたカスが残る。

どうして――？

そんな気持ちがボクの中にこだまする。

そして、いろいろな感情が混ざり合った中、ボクは強く叫んだ。

そして、目が覚めた。

ボクの腕には、リستカット未遂の傷の痛みが残った。
状態は何も変わらないけど――。

何もできない腹立たしさに、近くにあった物を投げた。
すると、心地よい音とともに割れた。

ボクはその音のとりこになった。

そして今日も、物を壊す。

こんな日々から、どうやって抜けだせばいい――？

（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます。

文才も無く下手で仕方ありませんが、気持ちだけはわかっていただければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9842s/>

素直になれば...よかった...

2011年10月8日18時10分発行